

横浜開港場における英語教育

―ヘボンを介して開設した「横浜英学所」

権田 益美

はじめに

一八五八(安政五年)年、「安政の五カ国条約」の締結によって、外国人の居住区域は神奈川と定められた。それに従い各国の領事館が神奈川におかれた。一八五九(安政六年)年に来日した、J・C・ヘボン(James Curtis Hepburn)等宣教師も神奈川に居を構えた。しかしながら幕府側は、神奈川が東海道の宿場町で繁盛していること、江戸へと向かう街道上の重要拠点であることを鑑み、この地を永続的な外国人の居住地にすることに難色を示した。そこで、街道から離れた横浜村を開港場にすることを決断した。幕府は波止場、運上所、道路、橋を造成し、日本人居住地、外国人居留地を整備した。

一八五九年七月一日(安政六年六月二日)の開港時の段階では、アメリカ公使T・ハリス(Townsend Harris)は条約において、開港場は神奈川と定められていたこともあり、横浜の居留地に移ることに反対していた。そうした状況にかかわらず、オランダの領事が身元保証をしていた外国人商人クニフラー(Knifer)が、外国人商人第一号としてこの開港場に事務所を開業した⁽¹⁾。商館を中心とした商取引が開始され、外国商人が開港場に outlet すると、イギリスのジャーディン・マセソン商会(Jardine Matheson & Co.)のW・ケスウィック(William Keswick)やアメリカのウォルシュ商会(Walsh, Hall & Co.)のジョージ・ホル(Gorge Rogers Hall)も、より大きなビジネスチャン

スを狙って進出してきた。

開港場における貿易形態について諸外国は、自由貿易をめぐらした。日米修好通商条約第三条には、「其居留場の周囲に門牆（かき）を設けず、出入り自在にすべし」とある。

その後、締結されたイギリス、オランダ、フランス、ロシアとの通商条約でも同様の条文が見られる。諸外国は、日本人との自由な商業取引と交流を求め、往來の規制を禁止する条項を盛り込んだのである。しかしながら開港直後から、攘夷派の浪士による外国人殺傷事件が勃発した。そこで、一八五九（安政六）年十月、外国奉行とイギリス公使オールコック（Rutherford Alcock）は、攘夷派浪士の開港場への侵入を防ぐため木戸（関門）を設置することを協議した。関門は外国人保護を目的とする施設として開港場周辺に置かれることとなった。大きな問題となったのは、開港場の東側の丘からいまだに自由に出入りできることであつた。ところが、警備の弱点となつていた。幕府は、開港場の東側を開削し、長崎の出島のように開港場を海と川に

囲まれた地域にすることを目指した^②。関門は翌一八六〇（万延元）年に完成した。この年には、ビジネスの場が開港場に移つてきたこともあつて外国領事館側も開港場の横浜を外国人居留地として承認せざるをえなくなつた。

本稿では、幕末期に、対外的な意味で大きな変化を遂げる横浜開港場において、貿易の要となる税関業務を担う運上所にまず着目した。諸外国との貿易において、幕府側はトラブル時の迅速な対応をせまられた。そこで英語業務の充実、英語のできる人材育成を目指して英学所が開設された。英学所開設にあつては、そのカリキュラムの作成を担当、教師として活躍する宣教師のまとめ役としての宣教師ヘボンの役割は大きい。幕末の禁教下において日本の近代化に貢献したヘボンについても取り上げることとする。

第一節 横浜英学所―開設経緯と設置場所

一八五八（安政五）年「安政五カ国条約」の締結に伴い、幕府は対外政策の一環として、新たな職制を加えた。幕府

の指示で五名の外国奉行が任命された。開国の準備は外国奉行が中心となり進められた。翌一八五九（安政六）年、横浜開港と同時に外国奉行は神奈川奉行兼帯を命ぜられ、五名の外国奉行のうち二名は神奈川に交替で勤務することになった。神奈川奉行所の機構は、戸部役所・運上所・神奈川詰の三カ所からなる。その一つ運上所の創設は、日本における税関業務の開始を意味すると考えられる。運上所では、港を出入りする船舶の管理や貿易、関税関係事務を中心に、外交関係の実務的側面が担われた。

片務的領事裁判、片務的協定税等については、条約国アメリカ、イギリス、オランダ、フランス、ロシアに対して適用された。その意味では、日本は五カ国に対して半植民地的な状況におかれていたといっても過言ではなかった。こうした不平等な商取引の改善に向けた一つ的手段として、幕府は英語のできる役人の育成を急ぐ必要があった。幕府は対外政策に対応しうる外国語（特に英語）の習得が必要であると痛感した。その具体的措置の一つが、外国と

の交易のフロントになる運上所役人の英語力の向上にあった。そのため当該業務に関わる人材の育成が当面の課題になった。そこで、一八六二（文久二）年には、幕府の依頼でヘボンが参画し、宣教師等が英語教育を行なう機関が、「運上所官舎前」に設立されることとなる⁽³⁾。

「申七月十八日於対馬守殿御宅中務大輔殿対馬守殿重国ミニストルハリス江御対話書⁽⁴⁾」には、一八六〇（万延元）年の英学所設置のきっかけとなった対話が記されている。この話し合いは、老中安藤対馬守（信正）宅で行われた。そこには、老中脇坂中務大輔（安宅）、安藤対馬守、アメリカ公使T・ハリスの三者が登場している。T・ハリスが日本人青年に対して英語伝習への積極的姿勢をみせ、日本側も受け入れの方向で検討をはじめることが記されている。伝習所の場所は神奈川、伝習予定者については「米医両人神奈川ニ罷在候、右両人居宅最寄ニ御座候ハ、伝習方兩人より指授可仕候」とある。ここでの神奈川に滞在する二人とは、ヘボンとS・R・ブラウン（Samuel R. Brown）を

指す⁽⁵⁾。この三者会談では、ハリスが「医師二人」と紹介している。しかしながら、ヘボン は医療活動を行っていたが、S・R・ブラウンは医師ではなかった。S・R・ブラウンは、一八三九（天保十）年には、マカオにてモリソン記念学校の校長を務める等教育に関して専門性の高い人物として知られている。一八五九（安政六）年十一月に來日、ヘボンと同じく神奈川に居を構えた宣教師である。おそらく、禁教令下の日本の状況を慮って、「二人の医師」と言う表現になったのではないかと推察される⁽⁶⁾。

『横浜沿革誌』の一八六二（文久二）年の記述をみると、「運上所前官舎ニ英学校ヲ開校シ：⁽⁷⁾」とある。この記述より、この年には、運上所前に英学所⁽⁸⁾が設置されていたと考えられる。運上所の設置場所については、一八六五（慶応元）年に普請役の市村貫吉よって描かれたと伝えられる「御役所其外地割絵図⁽⁹⁾」を見ると、現在の神奈川県庁（横浜市中区）の地に建てられたことがわかる。この絵図により、運上所前に英学所があったことも確認できる。絵図に

は「元外国方調役御役宅当時英学所」とあるが、それは現在の横浜地方裁判所のあたりである。この史料からも、一八六五（慶応元）年の時点では、運上所前に英学所が設置されていたと考えられる⁽¹⁰⁾。

翌年の一八六六（慶応二）年に通称「豚屋火事」が発生し、開港以来発展してきた横浜の地の多くは焦土と化した。この火事で英学所も焼失した。一八六七（慶応三）年には運上所のあった土地の向かいに石造二階建の新庁舎が建設され、「横浜役所」が開設された。運上所の主な職務は、「横浜役所」に引き継がれた。

通称「豚屋火事」の発生以降に、英学所は弁天社隣に設置されたとする説がある⁽¹¹⁾。一川芳員による「横浜明細図⁽¹²⁾」にも弁天地区に「語学所」と表記された場所がある。しかし、この地図上の表記は「語学所」となっているので、それを「英学所」が移転し名を改めたものであると考えるか、また幕府が新たに設置した「仏学所」を「語学所」と考えるか、諸説にわかれるところである⁽¹³⁾。また英学所の

閉鎖時期⁽¹⁴⁾についても移転の有無に伴い、その時期が異なっており定かでない。

第二節 横浜英学所の運営とヘボンのかかわり

―担当教師の活躍

英学所開校当時の教師は、『横浜沿革誌』によると、「ブラウラン並神奈川奉行手附翻訳方石橋助十郎、太田源三郎等を教師とし…⁽¹⁵⁾」とある。ここでのブラウランは前出のS・R・ブラウンのことである。本稿第一節では、T・ハリスがS・R・ブラウンを宣教師としてではなく、医者として幕府に紹介したと記した。来日時には、医療宣教を中心に展開したヘボンであるが、英学所の運営にあたっては、前述のように英語教育について知識、経験ともに豊富なS・R・ブラウンと協力して運営を進めていることが確認できる。

日本人教師の一人太田源三郎は長崎唐通事であった。唐通事の仕事は、中国語の通訳・翻訳は勿論、唐船の来航・貿易の業務、在留唐人の取締り等にも携わり頻繁に交替す

る長崎奉行の外交・通商上の諮問をうけることもあった⁽¹⁶⁾。通事の中でも指導的立場にある鄭幹輔は英語の必要性を提唱しており、一八五九（安政六）年一月游龍彦三郎、彭城大次郎、太田源三郎、何礼之助、平井義十郎らを率いてアメリカ船に赴いた⁽¹⁷⁾。アメリカ人宣教医マックゴーアン(Daniel Jerome Macgowan)に指導を受けるためであった。マックゴーアンは中国語に良く通じており、生徒には中国語を媒介に英語を教えた。わずか数週間ではあったがアルファベットの発音やスペルを中心に指導した⁽¹⁸⁾。マックゴーアンはすぐに長崎を発ったので、太田はその後出島滞在中のアメリカ人ワルシ(R.J. Walsh)から英語を学んだ⁽¹⁹⁾。

英語の力をつけた太田は、一八六一（文久元）年に神奈川詰を命じられ、外交交渉に従事した⁽²⁰⁾。同年、太田は定役並通弁御用として遣欧使節（箕作秋坪、松木弘庵等）に随行、ロンドンのキングス・カレッジ(King's College)病院では通訳をおこなった⁽²¹⁾。

帰国後、一八六二（文久二）年に、太田は英学所教師として迎えられた。翌一八六三年に神奈川奉行支配定役格になった。太田の役宅の庭に高橋是清が家を建て住んでいたことから同じ敷地内ということもあり、太田と高橋の親交が窺える²²。太田は一八六七（慶応三）年には翻訳方となった²³。

もう一人の日本人教師石橋助十郎（後に政方と名乗る）は、一八六二（文久二）年に英学所の教師に任命された。

長崎出身の石橋助十郎は、オランダ通詞として代々仕える石橋家に、生まれた。長崎では、一八四八（嘉永元）年には稽古通詞、一八五五（安政二）年には小通詞末席として活躍した。石橋は一八五八（安政五）年オランダ通詞の職務のかたわら、アメリカ人水兵や米艦ポーハタン号付牧師ウッド（Henry Wood）から英語を学んだ。ウッドによる学習期間は約二ヶ月、その授業内容は、文字の発音、綴字法、単語、読み方、文法、作文などのほかに、数学、天文、地理、歴史、物理学を英語で学習するよう組まれていた²⁴。

石橋は一八五九（安政六）年神奈川詰を命じられ、神奈川奉行支配として外交交渉・翻訳に従事した。英学所教師への採用は、彼の英語力はもちろんのこと、一八六一（万延二）年に英単語・会話書『英語箋』を著していることも要件になった²⁵。

石橋は英学所教師歴任後、一八六四（元治元）年に御勘定格通弁御用頭取に就任した。その英語力は評判となり、若者たちが英語を学びにやってきた。一八六七（慶応三）年の六月と十月に、金沢藩士がそれぞれ九名ずつ計十八名入塾し、十二月には上田藩より一名が加わった²⁶。

一八六八（明治元）年に誕生した新政府において、外国官一等訳官、外務大訳官、同権少丞、同大書記官を歴任し、一八九三（明治二六）年に辞職するまで、外務省官吏として活躍した。一八七五（明治八）年、石橋はロンドンで、*An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language* を、E・M・サトウ（Ernest Mason Satow）と共編び発刊している²⁷。

ヘボンのJ・C・ラウリー (Lowrie) 宛の書簡をみると、英学所についての記述も多数みられる。まず、ヘボンは英学所について、「わたしどもが組織したばかりの学校⁽⁸⁸⁾」と記している。この記述はまさに英学所とヘボンの関係を鮮明に結びつけるものである。

英学所が開設して二年経った一八六四 (元治元) 年にはクラスは三クラス、生徒数は二十五名を数えた。S・R・ブラウンは開設当初から授業を担当し、一八六四年の段階では文法のクラスを担当していた。宣教師は毎日一時間ずつ授業を担当した。J・H・バラ (James Hamilton Ballagh) はABC (初級クラス) を、D・タムソン (David Thompson) は算術を教えていた。その段階では、ヘボンは「教授陣は充実していた」ということで、直接授業を担当することはなかった⁽⁸⁹⁾。

その翌年の一八六五 (慶応元) 年三月に、S・R・ブラウンが長崎に出張することになり、その間ヘボンが毎朝一時間英語を教えた⁽⁹⁰⁾。ヘボンの書簡では、その時の生徒は運

上所の通訳や政府の役人であり、彼らは英語の教科書を通して聖書の真理を学ぶ機会もあったと記されている⁽⁹¹⁾。その意味では、禁教下とはいえ、英語学習を通じて政府の役人たちまでがキリスト教についてふれる機会があったといえる。一八六五年の段階になると、カリキュラムも充実し、英語学習にとどまらず、タムソンが担当していた授業は算術と求積法を終え、代数の取り組みを始めた。彼らは教育に情熱を傾けた。しかし、英学所では基本的には奉仕であり幕府からは教師の奉仕に敬意を表して、数回謝金が出た程度であった⁽⁹²⁾。

同年六月には、英学所のクラスは五クラスに増設され、生徒数は四十名を数えた。再びヘボンは教壇に立ち、地理を担当した⁽⁹³⁾。英学所の授業は一層充実し、英語を使って地理や数学を教えるというカリキュラム編成をみた。当時の運上所の業務を鑑みると、外国との交渉において、英語を使って地理や数学の知識を習得することは必要不可欠であったと考えられる。また、この年の秋には、ヘボン夫人

のクララも英字所の教壇にたつ機会を得た⁸⁴⁾。当時の日本では女性が教壇に立つことは前例がなかった。彼女の登壇は、アメリカで教師経験があり、その実績がかわれたものと思われる。

第三節 教科書 Colloquial Japanese

—教科書は教師の手づくり

英字所での教科書には、S・R・ブラウンがまとめた『会話日本語』(Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese, together with An English-Japanese Index to serve as a Vocabulary, and An Introduction on the Grammatical Structure of the Language. Shanghai, Presbyterian Mission Press, 1863. 本稿では、以下 Colloquial Japanese と称す⁸⁵⁾)が使用された。その教科書の内容を整理してみると、序文、日本語の音声とローマ字による表記、文法の説明、英日対訳による会話文、対話文、補足説明、索引の

項目に分けられている。その中でも会話文は、百七十二頁にも及ぶ。

まず、対話文の中から、例をあげる⁸⁶⁾。英語の短文を表記、続いてローマ字で、日本語の発音を示し、次にカタカナ表記を提示している。

You are welcome here.

Kore wa yoku oide nasaimash'ia.

コレ ハ ヨクオイデナサイマシタ

会話形式で表記されている対話文 (Dialogues) I ~ VII は、横浜の居留地貿易の実態を反映した内容となっている点が特に興味深い。例をあげると、I ~ IV は、日本人 (native) と外国人 (foreigner) が商談を繰り広げる展開、V は、主人 (Master) と奉公人 (Servant) の会話となっている。そこには当時のビジネスに必要な事項が事例としてまとめられている。I では「茶を買う」、II では「絹を商人と外国人」、III では「外国への船積み」、IV では「絹を買う」、V では、「主人と奉公人」、VI では「両替」、VII では「漆

器を買う」といったように、わかりやすくまとめられている。その意味では、英語の実践的教育を主眼にしたテキストであり、実践的指導に基づく教授法であったといえる。

対話Ⅲの内容を見てみると、緑茶のアメリカ輸出までにかかる費用についての記述がある。税を意味する運上 (export duty)、売買の仲介をした際の手数料である口銭 (commission)、倉庫に商品を保管する料金として倉敷 (storage)、荷を運ぶ業者に支払われる軽子賃 (coolie)、荷を船にて運搬する際にかかる船賃 (boat hire) という当時のビジネス用語がとりあげられていて、段階的な商取引についての知識の積み上げを意識した教授法であった⁸⁷⁾。

Colloquial Japanese に関して中川は、その論稿の中で対話文の表現の特徴について次のように言及している。S・R・ブラウンが会話の参考にした日本人の層について、「全体的に、丁寧な日本語が多いのが印象的で、ある程度の身分の高い人達の日本語を観察する機会に恵まれたのである⁸⁸⁾」と。英学所の教科書としては、海外のビジネス客を

相手に展開する会話文を身につける上で、ふさわしい内容であった。

むすび

本稿では、日本の近代化における英学所の機能と役割を考察するために、英学所の設置、英学所のカリキュラム構成等々を論述した。その背後では、英学所でのような人物が学び、そこで受けた英語教育を、彼らがどのように活かし社会貢献を果たしたかが課題になった。問題意識を前に、後に金沢藩学問所の壮猶館の翻訳方、東京大学医学部の初代医学部長を歴任した三宅秀を通じて、英学所の位置づけを「むすび」とする。

三宅家は秀の曾祖父の代より医者であった。秀の父、三宅良斎（以下良斎と称す）は、肥前国（現在の長崎県）南高来郡北有村の生まれ、一八三〇（天保元）年より長崎で医学を学び、植原榮建に入門し、主に外科を修めた。植原榮建は、文政年間に来日したシーボルト (Philipp Franz

Balthasar von Siebold) に師事し、当時は蘭方医として活躍していた。長崎から帰ると長齋は、江戸、のちに下総国(現在の千葉県) 銚子で開業、一八四四(弘化元)年には、佐倉藩医となる。一八四八(嘉永元)年には、再び江戸にて開業、一八五八(安政五)年には、江戸お玉が池種痘所の設立に尽力した。

秀は一八四八(嘉永元)年、本所縁町に生まれた。この時既に長齋夫妻は、佐藤泰然の三男を養嗣子として入籍していた³⁹⁾。改めて長男が生まれたことから幼名を復一、のちに秀と改めた。一八五九年七月一日(安政六年六月二日)に開港した横浜に、長齋が秀を連れていったという話が三宅家には残っている⁴⁰⁾。長齋は横浜に出向くことにより秀が西洋というものを、身近に考え体験するきっかけを与えた。その後、長齋はこれからの時代こそ、西洋医学に取り組みべきと考え、秀を十三歳の時から小石川の高島秋帆の塾にいれ、英語を学ばせた。一八六二(文久二)年には、秀は退塾し、立石斧次郎の下で英学を学んだ。立石のはのち

に長野桂次郎と名乗るが、一八六〇(万延元)年遣米使節の一行に無給見習通詞として参加し、トミーの愛称でアメリカ人と交流を深めた人物である⁴¹⁾。

秀自身十六歳の時、一八六三(文久三)年に長齋の友人である外国方組頭の田辺太一の従僕として、第二回遣欧使節団の随員となった。フランスでは医学校や病院を見学している。秀は帰国後、自宅にて長齋から医学を学ぶ機会を得た。

一八六五(慶応元)年三月、秀は横浜にて英学所に入り、ヘボンに学んだ。その紹介者は、佐藤泰然とも、田辺太一ともいわれている⁴²⁾。前述のように、秀が英学所にはいった頃は、学生は、成年男子が多く、運上所の通訳とか政府の役人が主であった。秀は、縁故を頼り入学を果たしたわけであるが、当時十八歳であり、運上所での実務経験もなかった。それでも、秀の語学力は評価され、クラス分けの際は、最上級のクラスに入った。彼の後の進路は別にして、英学所の同じクラスには、のちの植物学者、東京大学教授

となる矢田部良吉や戊辰戦争で五稜郭にたてこもった大島圭介がいた。大島は、降伏後投獄されるも、明治期にはその英語力が認められ政治家として活躍した。運上所の定役を務めた古屋作左衛門も同クラスであった。古屋は後に戊辰戦争に参戦し戦死した。別のクラスでは星亨が学んでいた。星亨は、後に税関長、英国留学後は、司法省付属代官人（後の弁護士）第一号となり、議員としても活躍する人物である。

秀は、医者になることを希望していたので、ヘボンから医学を学ぼうとした。しかしヘボンは当時主に眼科を中心に診察していた。そこで秀は内科学、外科学を学ぶため、元海軍軍医で、横浜居留地で開業していたアメリカ人医師アレキサンドル・M・ヴェイドル（Alexander M. Vedder）の下で約二年研鑽を積むこととなった⁴³。秀は、一八六七（慶応三）年には、九月より金沢藩から召し出され、壮猶館の翻訳方となった。一八六九（明治二）年になると、藩校の組織改革がなされ、新たに設けられた英学所の到遠館で、

教鞭をとることとなる。一八七〇（明治三）年には、太政官より大学（後の東京大学医学部）へ出仕の命が下った。これを機に、秀の医学への新しい道が開かれることとなる。

秀は佐藤泰然の養女さだ（松本良順の姉）と、泰然の養嗣子である尚中の間に生まれた娘、藤と結婚した。佐藤泰然を中心に形成され、主に婚姻関係によつて結ばれ発展を遂げる集団、特に同族意識を重んじる組織の一員となった訳である。佐藤一族は、日本の医学、陸軍、官庁にも勢力を延ばしていった。いずれにせよヘボンは、このように日本を中心に成しうる一族と親しく交際し、多くの教え子を持つていたわけである。

ヘボンは、J・C・ラウリー博士宛の書簡の中で、英学所については「わたしどもはむしろそれが将来、日本人に西洋の知識と諸科学とを教授し得る有力な学園の起源となるように望んでいるのです⁴⁴」と述べている。実際に英学所に英語・代数・地理などの科目が設けられたことによつて、運上所の事務処理が迅速に行われた。その意味では、カリ

キュラムの改善は外国人との応対を円滑にすすめるための必要性に基づくものであった。

ヘボンはこの機関を単なる通訳養成学校にしようと考えていたのではなく、近代的西洋学術を教授する学校にしようとしていたと考えられる。それは、一八六五(慶応元年、秀と共に学んだ人物の顔ぶれからもわかる。運上所関

係者の人材育成機関として発足した英学所が、この時点では既にその役割を拡げていたのである。学ぶ側の英語習得の目的も多岐にわたっている。それは、それぞれが幕末から明治期にかけて英語を活かして活躍した場を見れば明らかである。英語力を認められ政府の役人になる者、明治新政府とは対極に身を置き、戦いに赴く者、学者として名を成す者などさまざまな人間模様が展開されていく。

ヘボンをはじめ、教える側の宣教師にも、まず日本人に信頼を勝ち得るための知識が必要であった。禁教下といえども英語教育を進めることで、キリスト教布教のきっかけを掴もうと努力した。欧米の文化を受容しようとする日本

人に対して、注意深く、ある時は積極的に正しい日本理解に努めたヘボンであった。だからこそ、三宅秀をはじめとする、「日本の近代化」を担う人脈とも、英学所の運営をきっかけとして、繋がりをみせていくのである。

(注)

(1) 斎藤多喜夫「横浜開港時の貿易事情」(横浜開港資料館編集・発行『横浜開港資料館紀要』第十七号)一九九九年、一一頁。

(2) 「ヘボンのW・ラウリー宛書簡(一八六〇年六月五日付)」(岡部一興編、高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館、所収)二〇〇九年、五三頁。ヘボンは、堀割を作るのは明らかに長崎の「出島」と同じ方式であり、日本人と外国人のあらゆる交流や貿易を監視する意図があると記している。

(3) 茂住實男「横浜英学所(中)」(大倉精神文化研究所『大倉山論集』第三十輯)一九九一年、六六頁。

- (4) 通信全覽編集委員会編『通信全覽 第三卷』雄松堂書店、一九八三年、二六八～二八六頁。
- (5) 倉沢剛『幕末教育史の研究(一)』吉川弘文館、一九八三年、六六二頁。
- (6) 茂住實男「横浜英学所(上)」(大倉精神文化研究所『大倉山論集』第二十九輯) 一九九一年、二五四頁。茂住は「米医兩人」はヘボンとS・R・ブラウンとしながらも、前者は医師であるが、後者のS・R・ブラウンは医師ではない点を指摘している。その理由を、彼は「恐らく日米双方あるいはどちらか一方が、宣教師ということをかからさまにすることを憚ったためかとも推測される」と記述している。
- (7) 太田久好編『横浜沿革誌(全)』(復刻版) 白話社、一九七四年、七六頁。(太田久好編『横浜沿革誌』東洋社、一九九二年、七六頁、初出)
- (8) 英学所についてはいくつか呼称がある。幕府は設立交渉段階では伝習所と称し、ヘボンの日記では Yokohama

- Academy と記されている。また茂住實男は横浜英学所という言葉を用いている。いずれも同一機関であるが、一八六五(慶応元)年の「御役所其外地割絵図」に、英学所と記載されている。本稿では、表題には「横浜英学所」、本文では「英学所」とした。
- (9) 横浜開港資料館蔵(神奈川奉行所定式御普請懸神原氏旧蔵)五味亀太郎文庫複製本、一九九五年。
- (10) 横浜開港資料館編『横浜・歴史の街かど』神奈川新聞社、二〇〇二年、七〇～七一頁。
- (11) 茂住は、『日本教育史資料第七』文部省、一九九二年を引用、「英学所は初め運上所前に設けられたが、慶応元年頃弁天社の神奈川奉行支配定役空き役宅に移転し……」という一説を紹介している。それとは異なり、倉沢剛、前掲書、六六六頁では、神奈川県立図書館所蔵の「旧神奈川市街図」がとりあげられている。弁天地つづきの役宅地区に「語学所」と記されていて、この「語学所」が英学所にあたると倉沢は言う。英学所の開設場所をこ

の地と記述している。

- (12) 岩壁義光編『横浜絵地図』有隣堂、一九八九年、二六〇～二七頁。

- (13) 茂住實男「横浜英学所(下)」(大倉精神文化研究所『大倉山論集』第三十二輯)一九九二年、一六四～一六五頁の補注に、英学所の移転先についての詳しい記述がある。

- (14) 小林功芳『英学と宣教の諸相』有隣堂、二〇〇〇年には、「英学所は明治元年までつづいた」と記述されており、茂住實男「横浜英学所(中)」には「慶応二年十月二十日の横浜大火で類焼し、そのまま廃止になった」とある。前掲の『ヘボン在日書簡全集』のヘボン関連年表ivでは「一八六六年十月」廢校と記載がある。

- (15) 太田久好、前掲書、七六頁。
- (16) 林陸朗『長崎唐通事―大通事林道栄とその周辺―』吉川弘文館、二〇〇〇年、三頁。

- (17) 許海華「幕末における長崎唐通事の体制」(『東アジア文化交流研究』第五卷、所収)二〇一二年、二七四頁。

- (18) 古賀十二郎『徳川時代における長崎の英語研究』九州

書房、一九四七年、七五頁。釘本小八郎談として次のように紹介している。マクゴーアンが八十歳の時、釘本家に半年間滞在した。その際唐通事に英語を指導したことを回想し述べた。「彼らは五六人に過ぎなかったが、良く英語を覚えた」と。

- (19) 茂住實男『洋語教授法史研究』学文社、一九八九年、二九四頁。

- (20) 許海華、前掲稿、二七五頁。長崎時代小通事末席であった太田が神奈川奉行支配定役格に大抜擢されたのは、唐通事の中で最初に英語学習に取り組んだ五名のうちの一人であったこと、幕末の開港地において、外交・貿易の分野において実務経験のある得難い人材であったことに起因している。

- (21) 国際ニュース事典出版委員会編『外国新聞に見る日本第一巻』毎日コミュニケーションズ、一九八九年、原文編二五六、二五七頁。

一八六二(文久二)年五月九日版 *The Times* には、日本人の病院訪問に関する記事が掲載されている。

The Times (9th May 1862), "Yesterday morning five of the medical gentlemen attached to the Japanese mission paid a visit to King's College Hospital."

同年五月十二日版 *The Times* には、太田の名前も登場する。

The Times (12th May 1862) "On Saturday Dr. Minikury and Dr. Matski-Ko-an, accompanied by Ota, an officer of the mission, paid another visit to King's College Hospital." とある。

(22) 高橋是清、上塚司編『高橋是清自伝(上)』中央公論社、一九九二年、二七〇―二八頁。高橋がヘボン夫人のクララやバラ夫人 (Margaret Tate Ballagh) から英語を習っていたので、太田は英学所での職務をはなれても、高橋を通じて、なお当時の英学所教師を務める宣教師たちとなんらかの形でつながりがあったと考えられる。

(23) 茂住實男、前掲稿「横浜英学所(下)」一三八頁。

(24) 茂住實男、同右稿、一三五頁。

(25) 茂住實男、同右稿、一三五―一三六頁。

(26) 茂住實男、同右稿、一三六頁。

(27) 豊田實『日本英學史の研究』岩波書店、一九九五年、五七頁。

(28) 「ヘボンのJ・C・ラウリー博士宛書簡(一八六四年七月二十五日付)」(高谷道男編訳、『ヘボン書簡集』岩波書店、所収)一九八八年、一四八―一四九頁。高谷は訳注で英学所はヘボンの指示で文久二年十月幕府がはじめた学校と記している。また、ここでの「わたしども」とはヘボンとS・R・ブラウンを指すと考えられる。スマイス、宮永孝訳『日本における十週間』雄松堂出版、二〇〇三年、四七〇―四七二頁 (George Smith (ed), *Ten Weeks in Japan*, Ganesha Publishing, 2002, pp.422-423.) には、S・R・ブラウン宅に滞在中神奈川の副奉行が来訪した時の様子を次のように記している。「副奉行はアメリカ領

事を通じてブラウン氏に伝言を送り、日本の若者たちに英語を教えてもらえまいか、と打診した。若者たちを政府の御用をつとめる通訳にするのが目的であった。(中略) わたしがまだ神奈川にいたとき、副奉行とブラウン氏の交渉は継続中であつたが、いまごろは話合いがつき、平均して十五歳くらいの若者が、十名ないし十五名、とくに仕事のすべてから解放され、自由になると、ブラウン氏の完全な監理下におかれ、英語学習のしごとに精励していることであろう」と。このことからブラウンも幕府からの依頼で英学所の教壇にたつたことがわかる。

(29) このパラグラフは「ヘボンのJ・C・ラウリー博士宛書簡(一八六四年七月二十五日付)」(高谷道男編訳、前掲訳書、所収)一四八頁を整理しまとめた。

(30) 「ヘボンのJ・C・ラウリー博士宛書簡(一八六五年三月十六日付)」(高谷道男編訳、同右訳書、所収)一五四頁。

(31) 「ヘボンのJ・C・ラウリー博士宛書簡(一八六五年三

月十六日付)」(高谷道男編訳、同上訳書、所収)一五五頁。英学所の学生について次のような記述がある。「彼らは教科書から沢山の聖書の真理を拾いあげています」と。当時英学所では、英語の教材として『会話日本語』

(S. R. Brown, *Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese*, Shanghai, Presbyterian Mission Press, 1863) を使用していた。この中には聖書の引用箇所がある。No.724. Love your enemies, bless them that curse you: do good to them that hate you, and pray for them that despitefully use you and persecute you. がその一例である。

(32) 「ヘボンのJ・C・ラウリー博士宛書簡(一八六五年三月十六日付)」(高谷編訳、前掲訳書、所収)一五五頁。

(33) 「ヘボンのJ・C・ラウリー博士宛書簡(一八六五年六月十三日付)」(岡部編、高谷・有地訳、前掲編訳書、所収)一八五頁。

- (34) 「ヘボンのJ・C・ラウリー博士宛書簡（一八六五年十月十三日付）」（前掲編訳、前掲訳書、所収）一八八頁。
- (35) 本稿はStefan Kaiser (ed.) *The Western Rediscover of the Japanese Language volume Two*, 1995. の中に収められた *Colloquial Japanese* を参照した。
- (36) *Ibid.* p.179.
- (37) 『会話日本語』についての詳しい解説は、加藤知己・倉島節尚編著『幕末の日本語研究S・R・ブラウン会話日本語―複製と翻訳・研究―』三省堂、一九九八年、を参照のこと。
- (38) 中川かず子「明治期における日本語教本の研究（一）：S・R・ブラウン著 “*Colloquial Japanese*” と日本語教育における意義」（『北海学園大学人文論集』第十五号、所収）二〇〇〇年、一七一頁。
- (39) 酒井シヅ「三宅秀」（福田雅代編発行、『桔梗―三宅秀とその周辺―』、所収）岩波ブックセンター信山社、一九八五年、二六頁。良斎の養嗣子となった佐藤泰然の三男（松本良順の弟）綱彦は、後に病弱のため離縁となる。
- (40) 酒井シヅ「良斎と秀」。（福田雅代編発行、同右書、所収）二四～二五頁。
- (41) 原豊「ヘボン塾につらなる人々」暮しの手帖社、二〇〇三年、七一頁。
- (42) 酒井シヅ「三宅秀」（福田雅代編発行、『桔梗―三宅秀とその周辺―』、所収）二九頁。酒井はその理由として佐藤泰然の孫百太郎が同年三月にヘボン塾に入塾したことをあげて、百太郎と共に秀もヘボンに紹介したのではないかとしている。もう一人の紹介人を、田辺太一と考えた理由は、秀の下宿先が田辺の紹介であり外国方の役人安田次郎吉宅だったことによる。
- (43) 酒井シヅ「三宅秀」（福田雅代編発行、同右書、所収）二九頁。
- (44) ヘボンのJ・C・ラウリー博士宛書簡（一八六四年七月二十五日付）」（高谷道男編訳『ヘボン書簡集』、所収）一四九頁。